

〈講演会〉

古墳時代成立期の実像を求め続けて

北條芳隆
(東海大学文学部教授)

1. 大和主導説への批判

3世紀初頭に誕生した倭王権はどのような道筋と必然性のもと、奈良盆地の東南部に本拠地を定めたのだろうか。大和弥生文化がもともと卓越した力量を備えていたから政治的な優位性も発揮できたのだろうか。考古資料の実態を踏まえる限り、こうした意見には賛同しかねる。むしろ本州全域からの求心性や各地への波及と拡散、各地からの利便性を確保することに主眼がおかれ、地勢上の特性が考慮された結果の選地だとみるべきであろう。

その一方、筑紫や吉備、讃岐、近江など西日本の各地で醸成されてきた弥生終末期の墓制を再編統合して前方後円(方)墳は誕生した、との学説は定説化しつつある。とはいえ筑紫からの影響については、青銅鏡の多量副葬や丁字頭勾玉への志向性、南海産腕輪への憧憬といった、副葬品の組成にみる先取性に議論の重点がおかれてきた。しかしそれだけではない。時間の支配つまり暦の問題に焦点を絞るなら、議論はもう少し深まる。



図1 吉野ヶ里遺跡北内郭と満月

2. 吉野ヶ里遺跡から導かれる月の出暦

私たちの考古天文学共同研究の成果のひとつに、遺跡の周辺景観に同時代の天体運行を組み込み再現するシミュレーション・システム、arc Astro VRの構築がある。佐賀県吉野ヶ里遺跡の南北両内郭を試行用データとして添え、国立天文台から無料公開されている。

本システムを利用しつつ吉野ヶ里遺跡を点検すると、遺跡全体は弥生中期前半に築かれた北墳丘墓と雲仙普賢岳とを結ぶ南北線が祭儀用の中心軸であり、終末期の3世紀前半には北内郭がこの軸線上に挿入される格好で造成されたことがわかる。なお北内郭の軸線は中心軸線とは斜めに交差し、夏至の日の出に正面を向けたと推測されてきた。しかし厳密に測ってみると、夏至の日の出方位より3.2度北に振れる。

その意味を点検した結果、「高い月」の極限期より2年前の冬至付近に訪れる満月の出(月の下端が稜線に接する瞬間で定義)と本内郭の軸線は誤差なく一致することが判明した。216年と235年の12月12日(ユリウス暦表記)が当該日である。また郭内の東寄りに建てられた3棟の高床建物の軸線は、各前年の冬至12月22日の翌々晩(2015年)と翌晩(234年)、両年の1月22日、両年の2月21日に訪れる満月の出現方位と1度内外の誤差をもって一致する。

このことから北内郭の造営者は、現在の感覚でいうところの年末年始に到来する3回の満月の出を観測し、それぞれの建物の軸線を定めたいえ、当該年最終の満月の出に内郭自体の軸線に向けたと結論づけられる(図1)。

上記の様相は「高い月」における冬至近辺の満月への信仰としても捉えられる。しかし列挙した期日は、同時代の中国暦法における二十四節気(平気法)に当てはまる。12月22日は冬至(十一月中気)、1月22日は大寒(十二月中気)、2月21日は雨水(正月中気)なのである。つまり地上からみた黄道上の太陽の位置が30度移動する指標と満月の到来とが一致する先の両年のどちらかが、観測すべき年として選択された可能性が高く、各建物は月の出暦計としても評価できる。中国側の太陰太陽暦の基本知識を介在させなければ、このような現象は生じなかったに違いない。

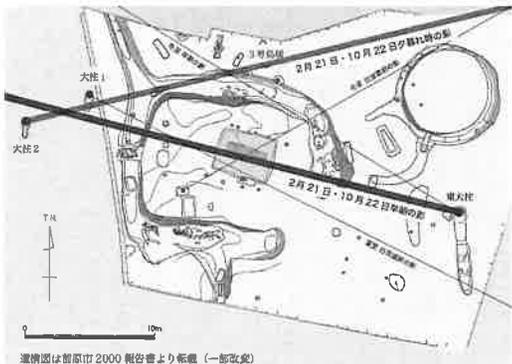


図2 伊平原農事暦

3. 平原1号墓から導かれる日の出暦

原田大六によって1965年に発掘調査が行われ、1988年からの再調査を経た福岡県平原1号墓では、日向峠からの朝の最初の陽光(太陽の上端

が峠の稜線から顔を出した瞬間)が東大柱を照らし、その影が墓壇の中心を貫く期日は1年に2回訪れる。2月21日と10月22日の両日であり、こちらも平気法の二十四節気と重なる。前者は雨水(正月中気)、後者は霜降(九月中気)である。

原田はこのうち10月下旬の日の出と伊勢神宮の神嘗祭の日取りとの一致に注目した。しかし2月21日とのセット関係こそ重要で、両日は春秋一対の重要な祭礼日、祈年祭と神嘗祭の催行期なのである。この両日を「平原農事暦」と仮称する。大柱(表)と影をもちいた日の出暦なので、直接視認よりも一歩進んだ暦計なのだが、吉野ヶ里遺跡と同様、中国暦法からの抜粋的な移植が確認できる(図2)。

なお平原1号墓の築造年代は3世紀初頭に比定されている。では中国暦法からの影響が及んだのは弥生終末期なのだろうか。解答は否である。吉野ヶ里遺跡では後期前葉、1世紀代に築かれた建物遺構の軸線にも「平原農事暦」との一致が指摘されるからである。つまり北部九州地域の要所では、本州や四国に先んじて太陰太陽暦の基本知識が中国側から到来し、抜粋的であれ実際に運用された可能性も高いと考えるべきである。もちろん同時代の後漢四分暦ではなく、冬至の日を基準に据えた基本的な暦計算法の部分借用として、ではあるが。

4. 纏向遺跡大型建物に移設された日の出暦

奈良県纏向遺跡辻地区の大型建物D(庄内3式期)は正面を弓月岳409mピークに向ける。本建物の中心からみて弓月岳からの日の出(太陽の下端が稜線に接するタイミング)となる期日は、4月12日と9月3日の両日である。現在の伊勢神宮の祭礼に照らすと、前者は「神田下種祭」、後者は「抜穂祭」の催行日に当たるので「纏向農事暦」と仮称することもできよう。ただし両日は二十四節気から外れ、直近の清明(4/8)とは4日間離れ、白露(9/7)とも4日間離れている。

ところが本建物の中央からみて三輪山山頂からの日の出を迎えるのは2月6日と11月7日、二十四節気の立春と立冬である。さらに纏向川の谷間からの日の出は2月22日と10月20日であり、日の出の定義を平原1号墓と同様に、太陽の上端が山の稜線から顔を出す瞬間に変更すれば、2月21日と10月22日になる。すなわち「平原農事暦」である。つまりこの大型建物Dからも、平原1号墓と非常に良く似た日の出の情景のもとで年間の節目が認知されたとみるべきである。この酷似が偶然の一致とはみなせない(図3)。

出現年代の先行性や日の出暦の指標となる山並の情景の近似からみて、古墳時代成立期の奈良盆地東南部には、北部九州地域から暦の体系が移設されたと判断すべきである。より具体的にいえば、平原1号墓の造営主体である福岡県三雲遺跡に居住した日知り=聖が直接奈良盆地を訪れ、日の出暦を移設した可能性が濃厚である。このとき三輪山は故地の王丸山に擬され、纏向川の谷は日向峠に擬されたのである。同様に龍王山は高祖山に擬され夏至の日の出の指標となった(図4)。

5. 原田大六説を再評価すべき現状

私は長年にわたり近藤義郎説と都出比呂志説に依拠しつつ、古墳時代の成立過程や、奈良盆地が新生倭王権の本拠地に選ばれたことの背景を検討してきた。しかし暦の問題に注目すると、北部九州地域の先行性と奈良盆地への二次的波及が明らかとなり、その影響力は副葬品の組成に限らず、時間の支配や祭礼日の制定といった、高度な政治性を帯びたものとして理解される。そして、これらの点をいち早く指摘したのも原田大六であり、その妥当性を再確認する結果となった。

纏向遺跡の日の出暦は伊都国からの直接移植であった可能性が高く、原田の「神武東遷邪馬台国大和説」と高度な整合性をもつ。となると原田説を追認する森浩一説や、そこに独自の見解を加えた寺沢薫説も併せて重視すべきこととなり、今列挙した諸説を総合したうえでの理論的な枠組の再構築が求められる。もちろん初期倭王権は伊都国弥生王権からの正当な後継者として成立した、という実像を踏まえて、であることはいままでもない。以上が古墳時代成立期の実像を求め続けてきた私の現在の到達点である。



図3 纏向農事暦と平原農事暦

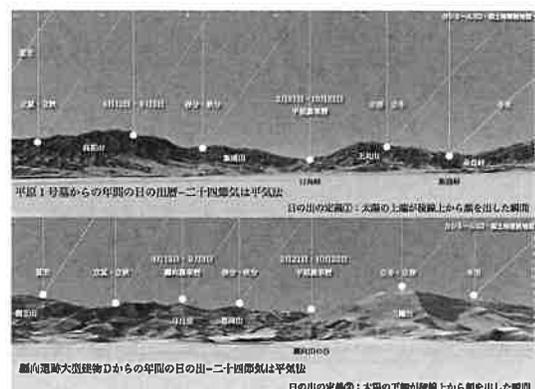


図4 日の出暦の情景比較